

平成23年11月17日

派遣報告書  
(短期派遣 EUROPA)

氏名：岩崎理恵

派遣先：ロシア国立人文大学

派遣期間：2010年10月20日～2011年10月17日（12ヶ月）

【派遣の概要及び成果】

報告者の研究分野は20世紀ロシア詩文学であり、中でも19世紀末から20世紀初頭にかけて活動したロシア象徴主義の代表的詩人、アレクサンドル・ブロークの創作を研究対象としている。博士論文執筆の過程で、ブローク研究の権威であるロシア人文大学のD.M.マゴメードワ教授の指導を受けるため2009年10月よりロシアに渡航し、研究を進めていた。

2009年度、日露青年交流センターの若手研究者等フェローシップでの渡航中は、ロシア語での論文作法等、今後研究を続けて行く上で必要となるリテラシーを身に着けること、及び人脈作りを目標としていたが、2010年度、短期派遣EUROPA制度を利用しての派遣期間中は、前年に築いた土台を元に業績を積み重ねることをねらいとしていた。

派遣期間内の研究成果は以下の通りである。

2010年12月～2011年3月

早稲田大学演劇博物館の翻訳プロジェクト「演劇研究基盤整備—舞台芸術研究文献の翻訳と公開」に参加、ブロークの演劇論の翻訳を担当。2011年4月よりウェブ閲覧開始。

([http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/trans/modules/xoonips/listitem.php?index\\_id=12](http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/trans/modules/xoonips/listitem.php?index_id=12))

「ヘンリック・イブセン」（1908年）

2011年2月9日～11日 国立人文大学東洋文化研究所主宰 第13回国際学術会議「日本の歴史と文化」にて報告（モスクワ、国立人文大学）、“*Orientalia et Classica*” Vol.39 «История и культура традиционной Японии 4»に投稿（2011年発行）

「A.ブロークの長編詩『十二』の日本語訳の特徴」

«Об особенностях перевода поэмы «Двенадцать» А.Блока на японский язык»

2011年4月15日～17日 タルトゥ大学スラヴ人文学科主催 若手研究者向け国際学術会議にて報告（エストニア、タルトゥ）

「A.ブロークの第1巻詩集における王女（царевна）の形象」

«Образ царевны в первом томе стихотворений Ал.Блока»

2011年5月25日～27日 ロシア科学アカデミー東洋学研究所主催 第2回学術会議「東洋諸国におけるロシア人ディアスポラ」にて報告

「長編詩『十二』の日本語訳における「多声性」（ポリフォニー）の問題」

«Вопрос многоголосия в переводе поэмы «Двенадцать» Ал.Блока на японский язык»

2011年9月12日～14日 ブローク没後90年記念国際学会「『始まりと終わり』詩人の生と宿命」にて報告（モスクワ、ロシア科学アカデミー世界文学研究所）、学会論文集«Шахматовский вестник» 13号に投稿（2012年9月発行予定）

「王女」の形象の多元性の問題 作品«Так окрыленно, так напевно...»

«К вопросу полигенетичности образов: стихотворение“Так окрыленно, так напевно...”»

このうちエストニアでの学会参加に際しては、本プログラムからの助成を別に得て渡航することができたが、ロシア及びその周辺諸国の学会やシンポジウムでは、交通費・宿泊費のいずれかあるいは両方を参加者自身が負担しなければならないケースも少なくない。そのため、たとえ発表の機会があっても、参加するメリットと経費を常に秤にかけながら選ばざるを得ないのが実情である。こうした中で、プログラム経費からの支給により、エストニアのタルトゥという重要な研究拠点で貴重な体験ができたことはありがたかった（4月月例報告）。

2011年2月に派遣先の人文大学付属の東洋文化研究所、また5月にロシア科学アカデミー東洋学研究所でそれぞれ行なった報告は、翻訳者らが日本とロシアの作詩法の違いをどのように捉え、その隔たりを埋めていったかを長編詩「十二」の翻訳という例に即して見ていく試みである。比較詩学や翻訳論の観点から見て興味深い数々の事例をロシアの日本文学研究者らと共有することで、自身の研究と人脈の幅をまた少し広げることができた。

さらに、渡航当初からの目標通り、第一線で活躍する研究者が集う国際ブローク学会での報告で今回の滞在を締め括ることができたことには、大きな喜びと誇りを感じている。

無論、こうした活動は周囲のサポートなしには成り立たなかった。常に惜しめないアドバイスを下さったマゴメドワ教授は言うに及ばず、学会参加に先立ち提出する報告要旨から、報告の読み上げ原稿、論文集の原稿に至るまで、筆者が書くロシア語の文章すべてに目を通してくれた家庭教師のオリンピアダ・イヴァーノワさんには心から感謝している。

偶然ながら 2010 年は詩人アレクサンドル・ブロークの生誕 130 周年、今年 2011 年は没後 90 年の年に当たっており、報告者はその両方をロシアで迎える幸運に恵まれたことになる。これを記念して、予算の厳しい中、アカデミー版ブローク全集の第 8 巻が、またサンクトペテルブルグのロシア文学研究所（プーシキン館）からは『アレクサンドル・ブローク 研究と資料』の最新刊が刊行されたことも嬉しいが、モスクワ郊外のシャフマトヴォのブローク博物館保護区や、ペテルブルグのブロークの家博物館という詩人ゆかりの場で行なわれた記念イベント等に出席することができたことも心に残っている。

#### 【今後の課題】

帰国後は、9 月の学会で行なった報告を論文にまとめたほか、モスクワで読破した詩人の主要な評論 6 点のうち、「ロシア象徴主義の現状について」の翻訳に取りかかっている。これは 2010 年 12 月から 3 カ月にわたり参加した早稲田大学演劇博物館の翻訳プロジェクトで担当した「ヘンリック・イブセン」以来、二つ目の翻訳となる。また、本年度中に和文と欧文それぞれ 1 点ずつ論文をまとめる予定である。

今後の大きな目標は、2014 年 3 月までに、こうした成果を取り入れた博士論文を完成させ、日本におけるブローク研究の一つの到達点として世に出すことである。

ロシア滞在中は、上記のような活動を通して人脈も広がった。モスクワ、ペテルブルグの両文学研究所は、1997 年から刊行中のアカデミー版ブローク全集の編纂拠点でもあり、言わばブローク研究の中核である。また前述のタルトゥ大学のスラヴ人文学科は、ザラ・ミンツ以来の伝統を今につなごうと、定期的に「ブローク論集」を発行しているばかりでなく、ロシアやバルト三国、北欧など周辺地域を始め、世界中からスラヴ研究者の集う場でもある。今後日本に拠点を移すことになっても、学会への参加などを通じてこうした拠点や研究者らとのつながりを保ち、世界的な潮流の中で自身のテーマを深めていくこと、国際的な規模で行なわれているブローク研究、ひいては象徴主義、広くは銀の時代の文学・文化研究に寄与する人材になることを目指していきたい。